セザンヌ　―自然哲学としての芸術

自然への傾倒と美術館の体現する絵画的記憶への傾倒とのあいだで自らの制作を展開したセザンヌ。その大規模な展覧会が開催された機会に、この画家の作品群が提示する思考の諸局面を改めて検討する場を持ちたいと思う。その際、絵画としての絵画は、モネ、ターナーの作品の増殖とともに、[illegible]欲のもとで、自然哲学的な思考の展開を支えるその学術領域として機能してはいないだろうか。

I部　「自然と美術館との間で」
座談会（14：00～）

岡崎乾二郎
小林康夫
松浦寿夫

II部　「自然、筆触、リズム」
討議（15：30～）

荒川徹
佐藤雄一
林道郎
松浦寿夫

日時：　6月23日（土）
14：00～17：30（開場13：30）

会場：　東京外国語大学研究講義棟101教室
入場無料

主催 東京外国語大学総合文化研究所　共催 アートトレイス